

## その 42

### 万葉シュウほど

#### 素敵なショウはない



高岡・雨晴海岸

——それが、2019年3月の万葉故地鳥取での公演につながるようになったのですね。

はい。その成功に気をよくして、東京や他の万葉故地での上演や関連本の企画の売り込みをしたのですが、意に反して全滅。やはり、万葉集は面白いかもしれないけれど、「企画は通らない、お客は入らない、チケットや本は売れない」ので無理、という話。つまり、Nプロデューサーに言った通り、万葉集は、「三ない集」だったのです。知り合いの出版社や私が所属したNHK出版にも、関連本の出版など相談しましたが、無碍なく断られました。ということで落ち込んでいたところ、Nプロデューサーの家に、1本の電話が入ったのです。その時は不在で、普通なら連絡がつく状況ではなかったのですが、たまたま運よくつながった電話でした。

「鳥取の因幡万葉歴史館の館長です。家持の生誕1300年という節目の年の最後を飾る記念イベントとして、家持のお芝居を制作してくれませんか」。

金指真澄館長でした。館長は、生誕1300年に相応しい記念イベントができる経験豊かな演劇のプロを探していたのですが、残念ながら、そのような専門家はいない。「そう言えば、以前高岡で見た音楽朗読劇がなかなか面白かったので、連絡先がはっきりしないのだけれど、担当プロデューサーを探して連絡してみよう」ということでやっとたどり着いた電話でした。要するに、万葉集を舞台化するような専門家や他に競合するライバルがいなかったのが幸いしたのです。寂しいような、ありがたいような、いえ、滅多にない僥倖のような話でした。

そこで、なんとしても館長の期待には応えなければということで、私たち2人のプロデューサーはもともと無い知恵を絞り、ならば、お芝居の専門家ではない門外漢だからこそできる、大胆にして斬新な舞台にしようと腹をくくりました。そこで、脚本は、引き続き私が書くが、これまで培ってきたドキュメンタリー・タッチの新しい物語を構成し、音楽は、Nプロデューサーが30年前に付き合った世界的なヘヴィメタ・ギタリスト山本恭司、語り手は、純白のドレスを着て浪曲「シンデレラ」を唸ったこともある、今売り出し中の女流浪曲師玉川奈々福。主演には、家持公に惚れ込んでいる狂言師の和泉元彌、女優で朗読座を主催している紺野美沙子、そして、声優で鳥取ふるさと大使の下田麻美。衣装は高岡以来毎回面白がって見事な衣装を提供してくれる万葉衣装研究家山口千代子に、引き続きお願いしよう。文字通り、和と洋、古と新のコラボによる、言わ

ば、異種格闘技とも言うべき異色のメンバーを、本格的なシェークスピア劇の演出家山崎清介と脇を1人何役も演じてもらう練達の2人の舞台俳優にまとめてもらおうということで、最終的には思いもよらない強力なチームを編成することができました。いずれもそれぞれ創作の現場で戦っている「もののふ」たちでした。

万葉集の4516首の内、例えば、高岡で詠まれた歌、つまり越中万葉は330首以上あるのですが、同じ万葉故地でも、鳥取、つまり因幡の国で詠まれた歌は、わずか1首のみ。でも、その1首が凄いのです。万葉集の最後の歌「新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いや重けよごと」という、まさに絶唱なのです。それまでの4515首を、ズッシリ、この1首が受けとめています。この1首のために、2時間余りの脚本を書き上げたのですが、それが、音楽☆朗読☆劇「いや重けよごと～愛のもののふ大伴家持」でした。公演は、2019年3月9日、会場は、高岡よりさらに大きく、キャパ2000のとりぎん文化会館梨花ホールと決まりました。ちょっと身震いしています。



——身震いはともかく、タイトルの「いや重けよごと」はそのまんま、「愛のナンチャラ」は、ちょっと陳腐ではないですか。現役の名プロデューサーだった頃の小河原さんだったら、部下がそのようなタイトルを付けたら「やり直し」って、突き返していませんか。

やはり、そうきましたか……メインのタイトルは、「ますます重なれ良きことよ」と、家持からの「新しき時代へのメッセージ」で、とてもいいではないですか。多分、副題が「愛のナンチャラ」と、色恋を詠って軟弱で、陳腐と言いたいのでしょうが、それが、実は違うのです。確かに、家持は、万葉集に20人を越える女人と相聞歌を交わし、正妻を娶る前に、妾を持ち子をなすような恋多き、愛に溢れた男でした。江戸時代の高名な国文学者が、「家持は美男なり」と書いているように、多分今で言うイケメンで女性には持てたのでしょう。愛の歌人であったことは確かですが、「愛のもののふ」の愛は、色恋の愛だけではないのです。

言うまでもなく、「もののふ」は、武人、軍人のことですが、家持は、万葉を代表する歌人である前に、武門の名家を引き継いだ武人であり、兵部大輔、今で言えば、防衛省の長官、或いは次官まで務め、後々持節征東將軍にまでなった、言わば、軍の最高司令官だったのです。そんな家持の歌、とりわけ、「防人の歌」などを読み解いていくと、家持こそ、歴代の軍人の中で、最も民を愛し兵を思いやった司令官、つまり、男女間の愛だけではなく、もっと大きな人間愛とも言うべき、最高の「愛のもののふ」であったことが分かったのです。

——なるほど、そういう「愛のもののふ」ですか。もしかしたら、それが最初の話に出た、万葉集は「化石のような歌集」やら、家持は単なる「愛の歌人」ではなかった、という話と関係してくるのですね。

そうです。万葉集に入れ込み、憑りつかれたのは確かですが、やはり相変わらず、古文や短歌は苦手で、情けないことに、歌を詠む創作力はもとより、歌を鑑賞する感受性が乏しいことを改めて痛感したのです。ならば、なぜ万葉集に惚れ込んだのかと言えば、万葉集は、単なる歌集ではなく、古代のドキュメンタリーであることに気がついたからです。歌集と言いながら、そこには、万葉びとの「心と暮し」のドキュメントがあり、ドラマがあったのです。大昔の化石と、繰り返し悪口を言いましたが、むしろ、その通りで、その化石は、貴重な古代の情報が閉じ込められた「タイム・カプセル」だったのです。そこに、日本文化の原初の遺伝子が見事に封印されていたのです。それなら、そのカプセルを開けて、歌からドキュメントやドラマを取り出し、それらをドキュメンタリー・ドラマ、或いは、ファンタジック（このような英語はないようですが）・ドキュメンタリーとして構成すれば、そう、私にも書ける。ここで、化石の万葉集と私のドキュメンタリー志向が直に結びついたのです。ということで、万葉集とドキュメンタリーの間には、あまりギャップがなかったのです。

例えば、脚本の一部、「大嬢と役人」の場を見てください。今の役人のスキャンダルや過労死、自殺など、万葉の時代と変わらないことが分かります。

「そう言えば、万葉集には、あなたさまのようなお役人の歌もございますよ」、「何？われら役人の歌？」、「はい、浮気した女の家に、奥方に踏み込まれたお役人の歌とか」、「何！それは、目も当てられぬな」、「或いは、衣を乾す間もないほど働き過ぎて自殺されたお役人の歌とか……」、「過労死の歌？……いつの時代も、同じようなことが起きておるようじゃな」

いかがですか。「奥方に踏み込まれたお役人の歌」は、家持の 4 連の歌ですが、もうそれだけで面白いドラマになっているのです。また、「過労死問題」は、まさに現代、社会的な大問題になっています。ですから、歌や短歌が苦手な方も、ドキュメンタリーやドラマがお好きな方なら、十分楽しめる脚本になっています。

——「万葉集宣伝係」として、今後の抱負をお聞かせください。

万葉故地の高岡や鳥取でいくら公演しても、地元の人にはそれなりに知っていますから、あんまり宣伝にはなりません。となると、宣伝係としては当然東京公演ができないだろうかということになります。ところがこれが難しい。東京の人を相手に、素人のプロデューサーが万葉集で集客しようというのは至難の業。文字通り、「通らない、入らない、売れない」の「三ない集」で、たとえ公演ができたとしても、とてとても制作費を回収することができないのです。

そこで頼りになるのが、東京 2020 の Tokyo Tokyo Festival(TTF)の助成の公募でした。公募の基本コンセプトは、「レガシーの創出」ということですから、万葉集ほど、それに相応しいビッグなレガシーはないでしょう。今回の因幡の舞台は、言わば「レガシーの復興」、つまり、「古代文化のルネサンス」であり、これからも国の内外に向けてアピールしていきたい永遠のテーマです。

すでに終わった第 1 期の公募は全額助成ということもあり、世界 28 か国から 2400 件以上の応募が殺到して、採択はわずかに 13 件。あえなく落選。で、目下次期の助成公募にノミネートしようと準備しているところです。2 回目以降は半額助成ということもあり、残されたあと 2 回の公募に、内心期待はしているのですが、はてさてどうなることやら。助成というおまけを付けてもらっても、一市民の手で、万葉集のお芝居が実現できるのなら、こんな素敵なお芝居はありません。

——市民活動として、お芝居に取り組むとは、大胆素敵（？）、夢がありますね。

ところで、私事ですから、これまで人さまには言ったことはないのですが、昭和 39 年に、NHK に入局した時の志望はドラマ部でした。ところが、成績や評価が悪かったのでしょうか、それ以来、希望が叶うことはありませんでした。それが、ドラマはドラマでもお芝居として 50 年後に実現するのですから、人生捨てたものではありません。長生きはしてみるものです。万葉集もドラマ、人生もドラマということでしょうか。正直、人生ドラマとは大袈裟で恥ずかしいのですが、さらに思い返してみると、NHK 入局のちょうど 10 年前、つまりほぼ 70 年前の小学校 4～5 年の頃、地方の「童連」なる児童劇団に入っていたのです。それで、小学校の学芸会で、「泣いた赤鬼」の赤鬼の役が回ってきて、舞台上で演じたのです。ところが、セリフが覚えられなくて、タイトル通り「泣いた赤鬼」になりました。セリフだけでなく、演技も下手くそでした、舞台上に立ったのは、その 1～2 回きりでしたが、舞台上で観客の前に立った時の、あの異界に浮遊しているような感覚は子ども心にも忘れることはできません。それが、そもそも NHK に入り、ドラマ部を志望した動機だったのです。自分でもすっかり忘れていたのですが、私の人生の最初と、そして最後の最後に舞台があったということになります。わがささやかな人生ドラマです。ということで、私にとって、「万葉ショウほど素敵なお芝居はない」ことは、お分かりいただけるでしょう。

しかし、この「素敵なお芝居」の裏には、「素敵ではないドラマ」がいくつか隠れているのです。実は N プロデューサーと再会し、万葉プロジェクトをスタートした時、意気投合した同志がもう 1 人いたのです。N 氏の仲間の音楽プロデューサーで、むしろ彼が、「万葉集は面白いけど、ないない尽くしの、三集だよ」という私の忠告をもとせず、「それでもやろう」と、乗ってくれてスタートしたものでした。しかし、その後、万葉イベントは、私の予言通り、ビジネスにはならないので食べていけない。そこで、彼はプロデューサーの仕事の見切りをつけて、カウンセラーへの道を進むことになったのです。「素敵ではないドラマ」と言いましたが、万葉集をテーマに選んだせいで、音楽プロデューサーから心理カウンセラー転身したことは、素敵でないどころか、むしろ「素敵なお芝居」だったのかもしれませんが。音楽セラピーなる療法を耳にしたことがありますが、人の心を癒すという点では、同じ仕事なのかもしれないからです。

もう 1 つのドラマは、残念ながら本当に素敵ではないのです。わがドラマは、ある外プロの社長である友人から声をかけられたところから始まったことは前述しました。「日めくり万葉集」の制作を頼まれ、それをお断りして、再度頼まれたことで心変わりをして「是非やらしてほしい」、と引き受けた経緯がありました。その外プロは、小規模ながら、良質のテレビ番組を制作し、NHK や民放に提供してきた長い歴史を持つ番組制作会社でした。長年の念願がかなって、社長の提案が、NHK に採択され、「日めくり万葉集」の制作はスタートしたのですが、当然ながら、5 分番組の制作予算は低額。しかし、ミニ番組とは言え、480 本もの番

組のロケや取材には人並み以上の経費がかかります。ということで、結論から言うと、その後会社は経営が行き詰まり倒産してしまうことになるのです。社長は、病いも重なり、そのまま引退。会社の後始末で、関係者にとっては辛い人生のドラマが続いていると聞いて、私も忸怩たる思いがあります。

一方、「日めくり万葉集」の放送は極めて好評で、天皇皇后両陛下の一番お好きな番組という報道もされるほどでしたが、その制作会社はなくなり、「日めくり万葉集」という記念碑だけ残った、ということになるでしょう。その碑に墓碑銘を刻むとしたら、「ここに『日めくり万葉集』は残った。万葉集ほど、素敵なショーはない。しかし、素敵なショー売ではなかった」でしょうか。

しばらく後に、「いや重けよごと」の公演とT T Fの公募という2つの「公」の楽しみが控えていますが、それが「素敵なショー売」になるかどうかは、やはりどうにも心許ないのです。助成をもらってでも、何とかして、この万葉ショーが、東京はもとより、広く全国で公演できるようなビジネスとして実現できるようにしたい。いや、「素敵なショー売」にしなければならぬ。という訳で、「万葉ショーほど素敵なショーはない」から、「万葉ショーほど素敵なショー売はない」と言えるようになるのが、万葉集宣伝係の夢です。しかし、その夢は、「夢の如く」儚くも消えてしまうのですが、それも、後の話。

——なるほど。「ショー」とは、マリリン・モンローが踊り子として主演した1950年代のミュージカル映画「ショーほど素敵な商売はない」のことですね。映画は、最後に、モンローはじめ全員が勢ぞろいしてテーマソングを歌い踊るのですが、今回の舞台も、最後に全員で、万葉集最後の歌を歌い上げるのでしょうか。

はい、モンローに負けてはおられません。こちらは、万葉集の最終歌「いや重けよごと」に、新井満さんが曲を付けた「祝い歌」、それに合わせて踊る因幡名物の「傘踊り」で、「万葉ショーほど素敵なショーはない」と2時間にわたる舞台を締めくくります。

そう言えば、生前親しくしていただいた国語学者の金田一春彦さんは、昭和31年の『文芸春秋』に、「万葉集の謎は英語でも解ける」という記事を書いているのですが、そこで、万葉集を、Man-yo-shewと英語表記した上で、次のように読み解いています。Many-o-shew。Manyは言うまでもなく「たくさん」、そして、oはode（頌歌、抒情詩）の略語、shewはshowの古語で（いずれも、コンサイスのポケット辞典にも出ています）、その意は、「たくさんの抒情詩のショー(陳列)」なり。つまり、万葉シウであり、万葉ショウなのです。当時、万葉集をいろんな外国語で読み解ける、という風潮を皮肉って書いたようですが、60年以上も昔に、万葉ショーという言葉を書き残しているのですから、さすが、わが敬愛する金田一先生！日本語だけでなく、英語も詳しかったのです。

——「万葉ショー」ですか。かく言う私も高校の授業以来万葉集を読んだことがないので、今年（2019年）3月の万葉ショーを期待しています。東京公演が実現できるといいですね。

（聞き手） 一般社団法人 日本作家クラブ 発行『文芸』編集人 藤橋和浩